



# 赤水さん

地図に広がる  
いきいき人生

## ③きっかけ

数え14歳から通った常陸国下手網村(現高萩市下手網)の私塾でめきめきと才能を伸ばした長久保赤水さん(1717~1801)は32歳の頃、奥州いわき(いまの福島県)の寺に招かれます。「論語古訓」の講義を頼まれるんです。

「この頃だと思っただよ。途中で道に迷ったりして、地図の必要性を痛感したんじゃないかなあ」

江戸中期から明治にかけてベストセラーとなった日本地図「改正日本輿地路程全図」(通称赤水図)を63歳で作ら上げた赤水さん。一族の長久保片雲(本名・源蔵)さん(89)は高萩市に「なぜ地図作りに目覚めたのでしょうか?」と尋ねたところ、返ってきた答えがこれでした。赤水さんは35歳の頃から、地図を書き始めたといわれています。

でも、赤水図を見ると本当に道に迷ったんじゃないかと思わされます。街道、河川、宿場、名所・旧跡などが詳細に書き込まれています。だから発売されるとたちまち評判となり、旅行

# 道迷い着想? サービス精神満載



に、ビジネスにと愛用されるんです。

その地図がなんと、石岡市の綿引正義さん(79)方に伝わっています。歴史の重みを感じます。でもなぜ綿引家にあるのでしょうか。

「5代前の政八郎のものではないかと想像しています。うちは私で28代目ですが、江戸時代末ごろまで松本屋という旅館をしていました。政八郎は信心深い人で、全国の神社仏閣に参拝するためによく旅行していたので、この地図を頼りに歩いていこうと思っただよ。赤水図がベストセラーになった理由は、誰もが自由に購入できたという点にあるんです。

ここが伊能忠敬(1745~1818)の「伊能図(大日本沿海輿地全図)」とは大きく違います。忠敬は当初こそ自費で地図作製に取り組みのですが、やがて幕府のお墨付きを得て、資金、人材、物資などの援助を受けて全国を測量します。そのため完成した地図は幕府所有の「マール秘」扱いでした。

綿引さんは語ります。「(赤水の)地図は折り畳み式でしたが劣化がひどくなったので、祖父が表具師に頼んで掛け軸にしたんです。骨董屋も売ってくれますが、手放すつもりはないですね。家宝です」

精度の高さに加えて、折り畳み式である点も赤水図の画期的なところ。「ハンデタイプ」なのです。赤水さんって頑固な面もあったようですが、地図を買ってもらうためにはあれこれ工夫する。初版をパリジョンアップさせた2版では浅間山や阿蘇山に煙を立ち上らせ、那智の滝も描き入れたんですよ。サービス精神が旺盛で、着想もユニークなエンターテイナーだったと思うんですね。

次回は再び、地図作りに目覚める前の20代の赤水さんに話を戻します。

(フリーライター・岡村青)

※原則本欄の掲載です

①綿引正義さん方に伝わる「赤水図」  
②「赤水図」を所有する綿引さん。見ているのはレプリカ=いずれも石岡市